



広い砂浜と遠浅で穏やかな海が特徴の和田海水浴場。西方には「若狭富士」と呼ばれる青葉山がひかえ、海無し景色良しの海水浴場です。

福井県大飯郡高浜町

美しい海と観光の町「高浜町」

原子力発電所立地以前は、昭和四十年から四十五年度の財政力指数が〇・三前後と、ひつ迫した状況でした。町は財政健全化と過疎脱却には企業誘致が不可欠と判断、昭和四十年に町か

過疎脱却を目指して町が原子力発電所を誘致

高浜町では、林業・漁業・農業は主要産業まで成長しませんでした。景観に優れた全長約八キロの遠浅の海岸に恵まれています。なかでも和田海水浴場は、環境省が選定した「日本の水浴場八十八選」に選ばれています。早くから夏の観光産業が町を支えて来ましたが、町の財政は厳しいものでした。

高浜町は、福井県の西端に位置する人口約一万二千人の町です。北側は若狭湾に面し、東側から南側にかけては大飯町に、西側は京都府舞鶴市と接しています。面積の約七割は山林が占めていますが、谷の少ない地形だったため、農山村型集落ではなく、早くから町として開けてきた歴史を持っています。

日本海唯一の海水浴場のある町、高浜町

ら原子力発電所誘致を福井県に陳情し、昭和四十一年に町議会が誘致決議を行いました。

儉約の精神を引き継ぎ、堅実なまちづくり

昭和四十九年、関西電力高浜発電所1号機が、翌年2号機、昭和六十年には3号機と4号機が営業運転を開始しました。高浜町では電源三法交付金と各種補助金を活用して、まず海水浴場の民宿でも悩んでいた飲水不足を解消すべく上水道整備に着手、次いで道路整備と並行して、小中学校の改修と町内全戸への有線放送施設整備、養殖事業等を進めました。

高浜町は発電所立地を契機として、住民福祉の充実と、大正時代から育んだ海水浴中心の観光産業をさらに発展させることでまちづくりを進めることを考え、今日に至っています。立地以前には職員の給与支給が遅れたこともあり、できる限り儉約に努めたと語り継がれています。現在も、財政的に余裕ができて、一気に施設整備に支出することなく、通年型の観光地を目指して堅実なまちづくりを進めています。

特集 電源地域のサクセス・ストーリー

福井県 高浜町

美しい海と観光の町「高浜町」 1

住民本位の広域連携を促進する

町営有線テレビ 2

漁業者の収入安定と通年型観光振興への取り組み

高浜名物トラフグの養殖 4

若狭高浜漁業協同組合 牧野隆雄さん

DATA PAL 高浜町 7

まちづくりトピックス 8

People プランナー

新たな集客の仕組みづくりに挑戦 9

高浜町企画情報課 森山一男さん

People サポートします 近畿経済産業局 岡村繁寛さん 11

Focus 政策・制度

「わがまちづくり支援事業」(その2)

福井県福井市「うらがまちづくり推進事業」

市長が提唱する「一人一役の運動会型市政運営」 12

Energy square

グリーン電力制度について 20

情報クリップ

産地材を高付加価値化する試み
株式会社小町の郷(秋田県雄勝町) 22

地場産牛乳を使用した新しいメニューづくり
株式会社野村町地域振興センター(愛媛県野村町) 23

平成13年度電源立地促進功労者表彰 24

エネルギープラザ鹿島2001開催/
電気のふるさとじまん市 25

表紙イラスト・相原健二



「地域のひろば」は、電気のふるさとの「まちづくり」を応援する情報誌です。

住民本位の広域連携を促進する 町営有線テレビ

高浜町では、昭和五十七年九月に、当時としては全国的にも珍しい町営有線テレビを開局しました。電源三法交付金をすべの町民に活用できる施策はないかと検討した結果、町内の難視聴対策と防災連絡体制の整備に取り組みことになり、有線テレビ事業に決定したのです。当時はNHK二局と民放二局しか映らない状況でしたが、開局後は町内全域でNHK二局に加え、民放五局と高浜町の自主番組の合計八局が視聴可能となり、町民に大変喜ばれました。

また全戸に対する防災連絡が迅速・確実になりました。庁舎と高浜原子力発電所とは光ファイバーで結ばれ、緊急時には有線テレビを通じ、町民に対して迅速に情報を伝達することができ、さらに双方向回線を整備したことから、町内のコミュニケーションが円滑になったことも評価され、喜ばれています。高浜町の有線テレビは、開局

当初から現在に至るまで、町職員が自主番組を制作しています。町内の出来事を住民の視点で知らせるうえで、町職員自らが放映内容を考え、取材することが効果的であり、なおかつ経済的と考えたからです。

これまで、高浜町の行政情報の伝達や町民の相互理解を深めることに役立ってきた有線テレビですが、これからは近隣市町村のCATVと連携し、有線テレビを近隣市町村との相互理解を深める有力な手段として活用しようとしています。

全世帯加入、 無料有線テレビの開局

高浜町の有線テレビは、加入費、運営費とも無料で提供されており、開局当初から町内の全世帯が加入しています（NHK受信料は各世帯戸別に支払い）。

高浜町では自主番組として「ウィークリーたかはま」を毎週水曜日に内容を更新し放映し

ています。この番組は町内の二ユース、町からのお知らせからなる番組です。その他、文化会館や郷土資料館での講習会やイベントのお知らせ、町立図書館の新着図書案内など有線テレビで紹介しています。水曜日に三回放映し、金曜、月曜にも再放送しています。

町民を主役にとらえた 番組づくり

高浜町では、毎週放映している「ウィークリーたかはま」の総集編を作成し、ダイジェスト版にして正月とお盆に放映しています。この総集編には町内で起こった半年分の出来事が整理されており、高浜町の移り変わりを知ることができます。このため、里帰りした人たちに大変喜ばれています。

また、小学校の卒業前に、必ず全員の児童一人一人に将来の夢を話してもらい、その様子を「僕の夢、私の将来」と題して放映しています。この番組は八年後彼らが成人を迎えた時に再度放送し、当時の姿を振り返る「タイムカプセル」として人気を呼んでいます。高浜町の有線テレビは、町の

二ユースを放映するとともに、町民一人一人が町の主人公というまちづくりの基本的な考え方に基づいて、町民の一人一人を大切にされた番組づくりを進めています。

短期間で職員を 制作スタッフに養成し 自主番組を制作

高浜町のこうした番組は、制作費用をできるだけ抑制するため、開局当初から町職員によってつくられています。企画情報課の職員四名が番組の企画制作から運営までを兼務して、二名が企画編集、一名がナレーションとアナウンス、一名が技術を担当しています。担当者は全くの初心者であり、配属当初にNHKで四日間の研修を受けたのですが、これは研修コースの中では最短で参加費の安いものです。実際の機材操作や番組制作のノウハウは、前任者や先輩達に尋ねて回り、そして自ら工夫を重ねて番組づくりを進めています。

現在、番組編集を担当している企画情報課の金森さんによれば「担当課から原稿を提供してもらうのですが、簡単な資料だ

けを渡されてしまうこともあり、具体的な構成は任されています」取材する時に特に気をつけていることは、皆さんの表情が良く映るように撮影することです。そして、出演した全員を公平に撮影することを心がけています」とのこと、情報や映像の組み立てに一番悩むそうです。

住民の生活エリアの 広域化、広域行政の動き

かつて、高浜町では農協が運営する有線放送電話があり、冠婚葬祭などの身近な情報を発信していました。現在の有線テレビも、町内五十七カ所の区長宅から区民に対して音声によって告知放送をすることができ、祭りの打ち合わせの招集など、区単位でのきめ細かなコミュニケーションが可能に発展させています。地域コミュニケーションの維持やコミュニケーションの活性化に役立ってきました。町の制作する番組では、主に町民に数多く出演してもらいながら身近な情報を提供するスタ

イルを取っています。しかし、最近では住民の生活エリアが広域化し、周辺市町村の情報も提供していく必要性が高まってきました。高浜町の有線テレビは開局後約二十年が経過し、老朽化が著しいため幹線ケーブルを光ファイバーに取り替える更新作業を実施しています。それと同時に、周辺市町村の中でCATVを持つ小浜市、大飯町、上中町と連携を図り、広域的なCATV網を構築し始めています。それぞれの既設のCATVを光ファイバーで結ぶことにより、広域的なCATV網が比較的容易に実現できるのです。

時期を同じくして、住民生活の広域化を背景としながら、国や福井県では、市町村に対して市町村合併をはじめとする広域行政を促す時代となりました。

福井県では、平成十二年度に県内市町村の合併パターンを示した「合併推進要綱」を発表しましたが、これは福井県が現時点で望ましいと考えた市町村合併の組み合わせ案を示したものです。所要綱には、高浜町に係する市町村合併の組み合わせ案として、小浜市、上中町、大飯町、高浜町、名田庄村の五市

町村の合併の組み合わせと、大飯町と高浜町の二町による合併の組み合わせが示されています（高浜町としては現在、市町村合併に関して方針を示していません。市町村合併は、あくまで町民が主体的に判断することと考えています）。

住民本位の市町村合併 を実現するには 広域CATVが有効

市町村合併に対する町民の理解を深めるためには、まず周辺市町村が相互に実態をよく知ることが必要で、生活者の視点で親近感をもつことが大切です。

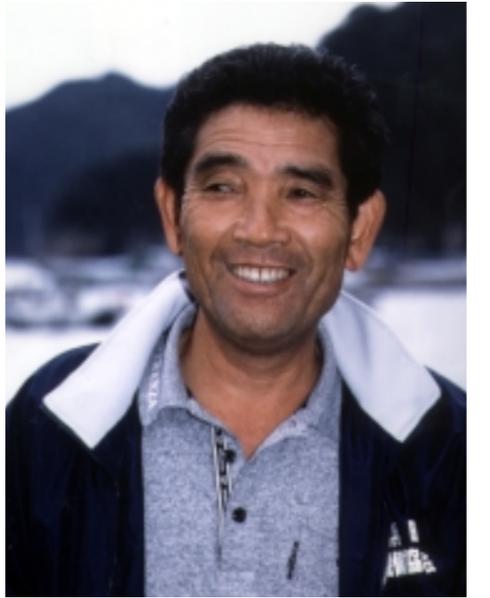
そこで高浜町では、二十年にわたり活用してきた有線テレビを、相互理解の手段として活用していくことを考えました。CATVのネットワークを広げることができれば、町民が周辺市町村のCATV番組を見る機会が増加し、情報量も格段に増えます。これにより、町民が市町村合併後の町の姿をイメージすることも容易になります。

住民と行政、発電所を つなぎ進化するCATV

高浜町の有線テレビは、これ

まで町内会の情報、高浜町の情報を町民に伝えてきました。また、原子力発電所の定期検査の様子も放映され、有線テレビは発電所と地域のつながりを深め、住民に安心感を提供することも貢献しています。こうした今までの役割に加え、高浜町では有線テレビを時代のニーズに沿ったCATVに進化させようとしています。町営の小規模なCATVであっても、連結することによって、市町村相互の情報を伝え合う役割を發揮できるのです。市町村合併という広域的なまちづくりの課題に対しても、高浜町が長年にわたり慣れ親しんできた情報媒体を活用することができるのです。

CATVの広域化に伴い、運営機関を一元化していけば、全体の運営コストの低減が可能です。しかしこれまでどおり、町民が主役の、温かみのある番組づくりを続けるためには、制作主体、費用面で新たな工夫が必要となります。高浜町は広域CATVを将来にわたって町民に役立つものとするため、新たな挑戦をはじめとしています。



若狭高浜漁業協同組合理事
牧野 隆雄さん

(若狭高浜漁業協同組合内浦支所 電話 0770-76-1400)

漁業者の収入安定と通年型観光振興への取り組み 高浜名物トラフグの養殖

高浜町では、昭和四十九年に関西電力高浜原子力発電所1号機、2号機が営業運転を開始しました。これを受けて、発電所から出る温排水を活用した養殖漁業への取り組みが検討されました。福井県水産課の指導のもとに検討を始め、養殖試験が始まりました。

冬にフグ料理に訪れる観光客の客単価は夏の海水浴客の三倍

養殖の黎明期 マダイとハマチの養殖に着手

水産学部の門を叩いたこともありませんでしたが、専門の学者よりも、日頃トラフグに接している自分たちの方が多くの実務的な知識を持っていると認識したとどまりました。現時点でのトラフグ養殖の歩留まりは三割程度であり、他の魚種(例えばマダイは八割)を大きく下回ります。

を最小限にして、天然ものに近く、安全なトラフグを出荷したいという思いがありました。「ハダムシ」については、淡水に弱いことを経験的に確認していたため、淡水浴(淡水中を十分程度泳がせる。トラフグは海水魚だが、二十分程度であれば淡水中でも平気で泳ぎ回る)で極力対応しています。また、与

以上で、町ではフグを、通年型観光を振興する大切な観光資源と位置づけています。

昭和五十五年に養殖事業をスタートするにあたり、暖水性の養殖魚として既に養殖技術が確立され、消費者にも人気があつた。消費

たマダイおよびハマチを選択しました。特にマダイは高級魚として高値の取引が期待されました。これらの養殖事業は順調に立ち上がりましたが、マダイとハマチは瀬戸内海や九州沿岸で既に多く養殖されており、養殖開始後二三年で厳しい価格競争にさらされることとなりました。

と、寄生虫(「ハダムシ」)の発生がなかったため、養殖事業は順調にスタートしました。当時はトラフグの養殖自体が珍しく、天然物はきわめて高価であったため、特に生産が軌道に乗った昭和六十年と六十一年は、「出荷前に買い手が決まっている」状態でした。

高い魚価を狙って トラフグ養殖に取り組み

マダイとハマチに続き、より高い魚価を求めて、当時はまだ養殖が一般的ではなく、魚価もきわめて高く安定していたトラフグ養殖の検討を始め、これと同じく県水産課の指導により昭和五十八年より試験養殖に着手しました。参考にすべき事例がほとんどなく、手探りの状態でしたが、福井県観光振興課および高浜町でも「若狭ぶぐ」と名づけ、「越前がに」と並ぶ地元の特産品として育てることを目指しました。昭和六十年より本格的な養殖に取り組みましたが、当時は周辺海域でトラフグを養殖していなかったため、海域にトラフグ養殖の際に発生する病原菌が生息していなかったこと

このように順調に発展するのに見えたトラフグ養殖ですが、昭和六十二年に初めて寄生虫による被害が発生しました。対策としては「マリンサワー」という薬品が有効ですが、これは水温が摂氏二十四度を超えると使用できないため、寄生虫が最も多く発生する夏場に使用できないという問題があります。

二つの逆風 需要の低迷と 輸入フグとの競合

えるえさも魚のミンチ等の天然飼料を主体とし、飼料とともにビタミン剤を与えて体力をつけさせることで、病気の予防が図れるようになりました。

とが多く、使用できる医薬品が少ないトラフグ養殖は、他の魚種と比較してリスクが大きいといえます。このため、飼育しているトラフグが「全滅」した場合に備え、魚種の拡大はきわめて重要な対応なのです。

若狭高浜漁業協同組合内浦支所によるトラフグの出荷量(組合扱いのみ)は、昭和六十三年十一・六ト、平成三年十二

昭和六十三年以降養殖する魚種を拡大する動きが始め、一部の組合員は、当時わが国でもまだ養殖が始まったばかりで価格も高水準で推移していたキングサーモン(当時の価格は一キロ当たり千円程度)、ギンザケ、クロソイの養殖を始めました。



トラフグの生簀

トラフグの生簀は湾内の日引漁港の沖合200mほどのところに置かれている。若狭湾は岸から急に深くなっているところが多く、この付近の水深は30~40m。透明度は高く、漁港内でも水深5m程度の海底が手に取るようにはっきりと見える。

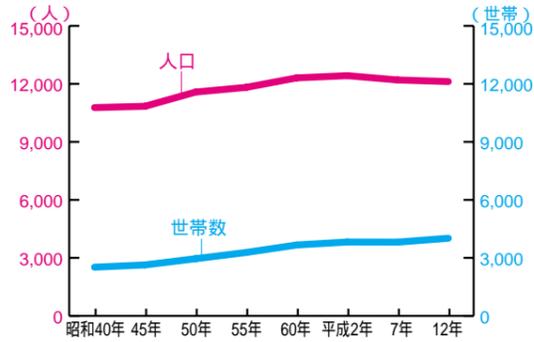
売上安定化策の試み
トラフグ養殖を基本としつつ魚種を拡大

平成二年頃からは組合員が本格的に魚種の拡大に取り組み始め、温排水によって海水温度が相対的に高いことを生かして、暖水性の魚種としてシマアジ、イシダイ、スズキ、イサキ、カンパチ、グレの養殖に着手しま

高浜町

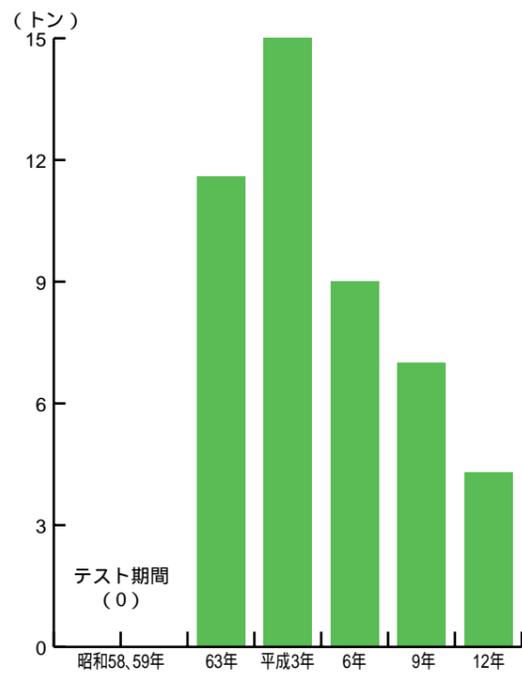
問い合わせ先 / 高浜町企画情報課 電話0770-72-7701
 高浜町役場ホームページURL <http://www.town.takahama.fukui.jp/>
 高浜町観光協会ホームページURL <http://www.mitene.or.jp/t-kankyo>

人口と世帯数の推移



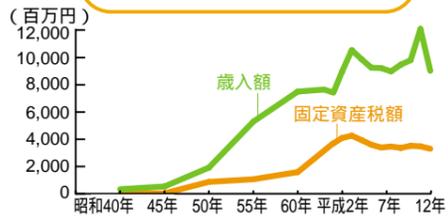
出典：国勢調査データより

トラフグ出荷量の推移



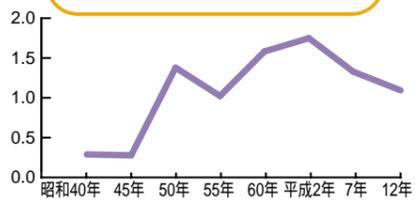
出典：漁業協同組合データより

一般会計の推移



出典：高浜町データより

財政力指数の推移



発電所概要
 高浜発電所 (関西電力)
 所在地 / 福井県大飯郡高浜町
 1号機 出力 / 82.6万キロワット (原子力) 運転開始 / 昭和49年11月
 2号機 出力 / 82.6万キロワット (原子力) 運転開始 / 昭和50年11月
 3号機 出力 / 87万キロワット (原子力) 運転開始 / 昭和60年1月
 4号機 出力 / 87万キロワット (原子力) 運転開始 / 昭和60年6月

高浜町の原子力の歩み小史

- 昭和44年 1号機電源開発調整審議会で承認 (第50回)
- 昭和45年 1号機着工
- 昭和49年 1号機営業運転開始
- 昭和45年 2号機電源開発調整審議会で承認 (第52回)
- 昭和46年 2号機着工
- 昭和50年 2号機営業運転開始
- 昭和53年 3号機電源開発調整審議会で承認 (第74回)
- 昭和53年 3号機着工
- 昭和60年 3号機営業運転開始
- 昭和53年 4号機電源開発調整審議会で承認 (第74回)
- 昭和53年 4号機着工
- 昭和60年 4号機営業運転開始

五色貝 (ヒオウギガイ)
 帆立貝の一種だが帆立貝が冷水性なのに対してこちらは暖水性。成貝の殻の大きさは直径10cm程度。赤、黄、紫など様々で美しい。ネットに入れて養殖し、出荷まで3年程度を要する。身は帆立貝に似るが、こちらの方が甘みがある。



トラフグの給餌作業

毎朝船を出して給餌を行う。与えている餌は魚をミンチにしたもの。トラフグは低密度でゆったりと飼育されている。悪天候時の作業は危険が伴う。



待つされます。
 天然トラフグ並みの品質を目指し、薬品に頼らず低密度で養殖
 内浦支所では、昭和五十八年の事業着手以来、継続してトラフグ養殖に取り組んできました。この結果、トラフグ養殖に関するノウハウが蓄積し、パイオニアとして他地域からの視察も受け入れてきました。現在、生産するトラフグは、低密度で養殖すること(九割四方の生簀に平均千匹程度の密度で養殖。水産庁のマニュアルでは十割四方に四千五百匹を基準としている)によって薬品にあまり頼らずに寄生虫や病気を回避するよう工夫しています。加えて日本の流れの速い潮と良好な水質のもとで養殖するため、天然物に近い肉質と味を実現しています。

コラム

牧野隆雄さんのお話

昭和52年に故郷の高浜町にUターン、漁船を購入して2年間漁を行った後、栽培漁業に転換しました。トラフグを中心とする養殖事業のかたわら、トラフグ養殖を手がける仲間8人と情報交換や商品開発のための研究会「ふくふく倶楽部」をつくり、「焼きトラフグ」や「トラフグのから揚げ」等新しいレシピの開発や、一般のお客様への直販など、トラフグ養殖の新たな可能性を模索しています。

した(現在もマガイ、ハマチは生産していますが、出荷量は少なくなっています)。
 平成五年には、養殖を行う海域整備のため、水産庁による補助事業として、日引漁港の養殖海域の外側に「浮き消波堤」が設置されました。事業費は一基約五億円で、三基設置されました。「浮き消波堤」の設置は、これまで養殖事業であげた実績が

評価されたことによるものです。さらに平成六年には、新しい水産資源の一つとするため、帆立貝(冷水性)の一種で暖水性の二枚貝である五色貝の養殖にも着手しました。五色貝の養殖には摂氏十度以上の水温が必要であり、通常は日本海側では養殖は不可能です。このため、温排水が活用できる高浜町の特産品として育成していくことが期

待つされます。
 天然トラフグ並みの品質を目指し、薬品に頼らず低密度で養殖
 内浦支所では、昭和五十八年の事業着手以来、継続してトラフグ養殖に取り組んできました。この結果、トラフグ養殖に関するノウハウが蓄積し、パイオニアとして他地域からの視察も受け入れてきました。現在、生産するトラフグは、低密度で養殖すること(九割四方の生簀に平均千匹程度の密度で養殖。水産庁のマニュアルでは十割四方に四千五百匹を基準としている)によって薬品にあまり頼らずに寄生虫や病気を回避するよう工夫しています。加えて日本の流れの速い潮と良好な水質のもとで養殖するため、天然物に近い肉質と味を実現しています。

家庭で「若狭ふぐ」を味わってもらえるような工夫をするなど、新しい販路開拓に向けた検討を行っています。また高浜町と高浜町観光協会では、「JR西日本とタイアップして「若狭ふぐツアー」を企画し、トラフグを目玉とした観光客誘致を図っています。

People

プランナー

町内の宿泊施設は 九千人収容可能

高浜町は、これまで関西方面から年間百万人を超える海水浴

高浜町では、「海浜活生（いきいき）タウンたかはま」をまちづくりのキャッチフレーズとした「高浜町総合計画」を、平成十三年三月に策定しました。高浜町のまちづくりの推進役として活躍中の森山企画情報課長に、観光地としての魅力向上に努力されている取り組み内容についてお話を伺いました。

新たな集客の 仕組みづくりに挑戦



高浜町企画情報課長
森山 一男さん
もりやま かずお

客を集め、観光が町の基幹産業になっていきます。町内の宿泊施設は、七百軒もあった時代もありました。町内の宿泊施設は現在減少していますが、それでも二百六十六軒の旅館や民宿が営業を行っており、町内全体の宿泊収容人員は約八千人に達しています。

観光客数の半減

透明度の高い海と美しい砂浜によって、いままでは多数の観光客が集まりました。平成二年は観光客数のピークで、年間百

五色山公園

内浦湾を望む丘陵地に、自然と芸術をテーマとした五色山公園が平成六年九月に誕生しました。五色山公園は、三十万平方メートルの敷地面積を持つ自然公園であり、カンザクラ、ソメイヨシノ、ヤエザクラなど開花時期が異なる六種類の桜が五千五百本植えられています。さらに四季の花が楽しめるように二千本の花木が植えられ、一・三キロの遊歩道が整備されています。季節の移り変わりの観賞や、野鳥の観察、ピクニックなどが楽しめます。



内浦湾を見わたせる眺望の良い丘に、展示施設、工芸工房、ゼミハウスなどが配置されています。建物の色は統一され花木をひきたてる役割を果たしています。

めます。

このほか五色山公園には工芸工房、展示施設などが整備され、絵画や工芸の愛好者が、作品づくりに没頭できる環境が整えられています。さらに研修施設として利用することができ、数奇屋風建物が移築されているので、五色山公園に滞在しながら、文化や自然をテーマとした研修や創作活動を行うことができます。

まちづくり トピックス

エルどらんど

「エルどらんど」は、関西電力と高浜町が協力して運営する施設です。従来の原子力PR施設よりも、観光客に数多く立ち寄りていただくための趣向を凝らしています。見たり触れたりできる展示施設を通じて、地球環境問題、原子力発電やエネルギー、若狭の文化や自然について理解を深めることができます。併設の町営ギャラリーでは地元のアートを生かして美術作品が展示されています。

「エルどらんど」の主要施設は、熱帯雨林を再現した温室、自然科学をテーマとした科学展示室、シミュレーション施設、町営ギャラリーなどです。

熱帯雨林を再現した温室では四百本と三千二百鉢以上の熱帯植物が植えられ、七千五百匹の熱帯魚が飼育されています。またシミュレーション施設は、米



三角屋根は、高浜町の伝統的建築様式である「切り妻屋根」を継承するとともに、高浜町のシンボル「若狭富士」（青葉山）を表現しています。

国から輸入した人気の高いアミューズメント施設です。「エルどらんど」が誕生したきっかけは、平成六年度に高浜町の有志が検討委員会を発足させたことにはじまります。町民、高浜町、関西電力が話し合っており、熱帯雨林を再現した温室の三角屋根は、ひときわ目立つ存在です。平成十二年度は年間二十万人を集め、海水浴場に次ぐ集客施設になっています。

三十万人を記録しました。しかしその後は、徐々に観光客が減少し、最近では年間七十万人程度と半減しています。

観光消費単価も減少

一方、観光客の消費額は、平成二年には約四十億円が町内で消費されていましたが、平成十二年度では約十六億円程度と、ピーク時の四割に減少しています。バブルの時代には、観光客一人当たりの消費額は約三千元でしたが、最近では三分の二の約二千円まで下がっています。観光客が減少するとともに消費単価も低下しており、高浜町にとって深刻な事態が生じています。基幹産業である観光の建て直し、高浜町の大きな課題となっています。

ライバルは多様化した 趣味と海外旅行

観光客減少の要因は、長引く不況のせいだけではなく、町内の観光業がレジャーの多様化に対応できていなかったことが大きいと判断されています。もともと海水浴というのは、家庭に冷房が普及せず、国民が皆同じ娯楽を楽しんでいた時代からのレ

ジャーなのです。高浜町には有名な海水浴場があったために、かつて海水浴客に依存した観光が続いてしまいました。観光客数と消費単価が両方とも半減してはじめて、集客に対する工夫が不足していることに気付いたのです。

特に、観光客の主役である若い人がどのようなレジャーなら飛びついてくれるか、格安となった海外旅行と対抗していけるのか、ニーズ変化を酌み取り、滞在日数や地元での消費額を増やす工夫が必要になっているのです。海水浴客を、さらに異なるレジャーに誘う仕組みも考える必要があります。

観光資源を再発見

高浜町の海岸が美しいといっても、高浜町よりも雄大な自然を持つ観光地は国内にもたくさんあります。自然そのままの魅力だけを頼りとして、観光業を維持することは困難であると考えています。むしろこれからの時代には、自然の魅力を観光客にうまく翻訳して伝えてあげるような、自然の価値を引き出す仕組みを観光に持ち込むことが重要ではないかと思えます。

具体的な仕組みとしては、観光客に登山や自然観察の案内をしたり、ダイビングを指導してきれいな海中を見せたりするよ
うな「遊びの案内役」の充実が必要と考えています。町内には、こうした遊びの案内役にふさわしい人材もありません。ただし、個人的に営業しているので、こうした人たちが束ねて遊びのメニューを豊富にしていくことが必要です。若い人達の志向を読みながら、自分たちで新たな集客に向けた作戦を考えています。

新たな集客に挑戦

若い観光客をターゲットとした観光開発は、若いスタッフが取り組まないといけないと考えています。

現在、平成十四年五月の開業を目指して、町の動脈である国道二十七号に面した場所に、道の駅「シーサイド高浜」を整備しています。

町としては、ここを若い観光客が通年で高浜町に来ていた

くための拠点にしたいと考えています。運営方法は飽きの来ない本物志向を考えており、薪を使用する釜も用意して本場に負けないピザを提供するイタリアンレストランを目玉にしたいと思っています。ほかに、情報提供施設、物販施設、飲食施設、温浴施設などが整備される予定であり、福井県内では八番目の道の駅になります。

高浜町にはフグ料理という名物がありますが、若者向けの施設がこれを圧迫することはなく、共ににぎわっていきけるものと考えています。町では営業施設など運営したことはありませんし、議会でも将来の経営について心配する声など賛否両論があります。若い人たちの登用と新しい観光の起爆剤になるよう挑戦するしかないと考えています。

集客のポイントはソフトにあると考えていますので、運営面での検討を重ね、失敗しないように事業を進めています。外部に頼り過ぎず、町が主体的に考えた上で、現状を打開するための試みを行うべきだと考えています。

地区も観光開発に意欲

海水浴一辺倒の観光から脱却

昭和四十五年の万国博覧会で原子力の火を灯して以来、私も近畿経済産業局管内では、三十年以上にわたる原子力発電の実績が重ねられています。

現在、関西電力(株)の高浜、大飯、美浜の各原子力発電所が運転中で、管内に供給される電力の約四十五%を原子力発電が担っています。これは、国内でも非常に高い割合です。

管内の平成十二年度電力需要は、千五百九十一億キロワット時と前年より二%増加しました。しか

し十三年度上期は、猛暑の影響で八月三日には最大日電力量五億九千六百五十万キロワット時を記録したものの、前年度上期と比較して一・四%の減少となりました。これは長引く景気低迷による産業分野の生産調整が原因と見ております。

高浜発電所は、平成十二年度実績で利用率八十七%と順調に運転を続けています。管内の電力需要を支えることはもちろん、二酸化炭素削減の面でも、地球環境保護に大きく貢献していま

を図ることが高浜町の課題ですが、一気に観光の体質を変えることは難しく、地道に取り組みことも必要ではないかと思えます。ただし、行政だけの取り組みにも限界があるため、地域にも新しい観光を開拓していく気概を持っていただき、主体的に生き生きと活動していただくことが必要です。

内浦地区では、地域の住民が主体となったイベント実行委員会が組織され、新たな集客の芽が育ちつつあります。五色山公園を利用し、今年も、八月十八日に陶芸教室や絵画教室といった体験教室が開催され、夜には竹楽器を演奏する楽団を招いてコンサートが開催されています。

体験教室の参加者が約五百人、コンサートの参加者が約三百人と、参加者数は多くはありませんが、地域住民が主体的に取り組んでいるイベントだけに、これから大きなイベントに育てていくことを、町としても支援したいと考えています。「響け芸術の森」と名づけられたこのイベントは、電源地域産業育成支援事業を利用し、今年で六回目を迎えています。

「地元企業」の発電所と協力して施設を運営

高浜町では、企業誘致の一環として発電所を誘致しました。電力会社に過剰な依存をすることは全く念頭になく、むしろ地域に根を張った企業として、一緒に同じ目線で地域について考えてもらうことを期待しています。平成十一年五月に、科学展示施設「エルどらんど」が誕生しましたが、この施設は町と関西電力が共同で運営に当たり、町営のギャラリーも導入しているものです。こうした事例に見られるように、地元の企業と協力して町の集客力を高めることも重要であると考えています。

民間企業とも、互いに協力し合えるものは何かを議論すべきだと思います。

行政も町民も他人任せではなく、自らが主体的に打開策を検討し、そして挑戦をすれば、高浜町の新しい観光の道が開けるものと考えています。そして「地元企業」である原子力発電所とも、同じ地元の一員として協力し合うことができれば、新しい活力が生まれてくると考えています。

通年型観光地を目指す 高浜町を応援します



近畿経済産業局 資源エネルギー部長

岡村 繁寛さん

高浜町は美しい海や海水浴場が有名です。町の皆さまは、観光レクリエーションを軸としたまちづくりに取り組まれています。電源地域振興指導事業を活用し、平成十三年三月には総合計画「海浜活生(いきいき)タウンたかほま」を策定、通年型観光地を目指す方針、と伺っております。最近では、関西電力(株)と高浜町とが協力し、四季を通じた観光拠点として体験型施設「エルどらんど」が整備されました。また、電源立地促進対策交付金を活用して、温浴施設を備えた道の駅を平成十四年度に開業されることです。またソフト事業では電源地域産業育成支援補助事業で、「響け芸術の森」という地域活性化イベントを開催中です。当局としても、地道な地域振興と原子力発電所との共存を進める高浜町の皆さまに、具体的な成果が現れるよう支援を行って参りたいと考えております。

高浜発電所ではプルサーマル計画の実施に向けた準備が進められていますが、大変残念なことに、燃料集合体のデータ問題で、皆さまにご迷惑をおかけし

ております。このような状況下にあつて、福井県や高浜町の皆さまには、事態を冷静に受け止めていただき、大変感謝しており、皆さまの信頼にこたえるべく、原子力発電所等の安全確保・理解促進活動にさらに一層努力して参りたいと考えています。

経済産業省では、原子力発電について地域に密着した顔の見える広報活動や情報公開を進めており、当局では、高浜町においては、今年の十月二十七日に「エルどらんど」で全国講演キヤラバン「親子勉強会」(放射能ってなんだろう)を開催しました。今までの以上の信頼関係の構築に努めたいと考えております。

また、当局では新たに「近畿エネルギー・環境高度化プロジェクト」を開始しました。これは各地域において特色や強みのある産業に着目し、次代を担う有力な企業を育てるプロジェクトで、産業クラスター計画と呼んでおります。バイオインダストリー、IT、高度技術によるモノづくり、エネルギー環境分野を取り上げ、いずれは原子力立地地点の振興にも結びつけられればと考えております。